

四国横断自動車道建設にともなう 埋蔵文化財発掘調査実績報告

1984年3月

香川県教育委員会

例　　言

1. 本書は、四国横断自動車道建設にともなって昭和58年度に実施した、善通寺市金蔵寺下所遺跡・同市稻木遺跡、豊中町延命遺跡・同町財田古墳群の発掘調査実績報告書である。なお、豊中町四ツ塚古墳の調査もあわせて実施したが、現在調査継続中のため省略する。
2. 調査は日本道路公団高松建設所の委託をうけ、香川県教育委員会文化行政課が実施した。

調査組織は下記のとおりである。

総括	課長	遠藤 啓	調査総括所長	石塚徳治
	主幹	林 茂	係長	伊沢肇一
	副主幹	松本豊胤	調査担当	
庶務	係長	下河芳樹	(善蔵寺下所)	主任技師 廣瀬常雄
	主事	前田和也		技 師 薮田耕作
				嘱 託 河野 裕
		(稻木遺跡)	主任技師	岸上康久
			技 師	野中寛文
			嘱 託	中本雅之
		(延命遺跡)	主任技師	大山真充
			〃	池内右典
			嘱 託	片桐孝浩

3. 本報告書は各担当者の協議の成果を文末の者が責任執筆した。編集は各遺跡ごとに行ったのち、全体編集を伊沢、廣瀬が行った。
4. 調査に際して、下記の機関、各位の協力があった。

各市町教育委員会（善通寺市・観音寺市・多度津町・三野町・高瀬町・豊中町）、地元自治会・婦人会、地元各地区対策協議会、岡崎晋明、中井一夫、町田 章、水野正好、森 浩一

目 次

I	昭和58年度調査概要	1
II	金藏寺下所遺跡の調査	3
1	位置と環境	3
2	調査の概要	5
3	まとめにかえて	15
III	稻木遺跡の調査	16
1	はじめに	16
2	調査の概要	16
3	まとめ	22
IV	財田古墳群の調査	23
1	はじめに	23
2	遺構	24
3	遺物	26
4	おわりに	26
V	延命遺跡の調査	28
1	はじめに	28
2	遺構	29
3	遺物	30
4	おわりに	31

挿 図 目 次

第1図	発掘風景（金蔵寺下所遺跡）	1
第2図	金蔵寺下所遺跡と周辺の遺跡	4
第3図	発掘前の風景	5
第4図	金蔵寺下所遺跡地区割図	6
第5図	S B 8301・8302	7
第6図	S D 8326	7
第7図	S D 8326出土 弥生土器実測図	7
第8図	S D 8301全景	8
第9図	S D 8301出土 土器	8
第10図	S D 8301出土 土器実測図	8
第11図	S D 8301出土 木製品	9
第12図	S X 8301河川	9
第13図	S X 8301河川	9
第14図	S X 8301 流路変遷模式図	10
第15図	S X 8301 斎串出土状態	10
第16図	S X 8301出土 土器実測図	11
第17図	S X 8301出土 土器	12
第18図	S X 8301出土 渔具	13
第19図	S X 8301出土 渔具実測図	13
第20図	S X 8301出土 斎串	13
第21図	S X 8301出土 斎串・木製模造品実測図	14
第22図	稻木遺跡試掘トレンチ配置図	16
第23図	6トレンチ土層柱状図	17
第24図	稻木遺跡遺構配置図	18
第25図	稻木遺跡 S D 8301土層図	18
第26図	稻木遺跡 S D 8301・04・05	19
第27図	稻木遺跡ピット群	19
第28図	稻木遺跡出土 繩文土器	20
第29図	稻木遺跡出土 石包丁	20
第30図	稻木遺跡出土 遺物実測図 (1)	21
第31図	稻木遺跡出土 遺物実測図 (2)	22
第32図	財田古墳群と周辺の遺跡	23
第33図	財田古墳群調査トレンチ配置図	24
第34図	財田古墳群調査風景	25
第35図	財田 2号墳全景	25
第36図	財田 2号墳石室床面	25
第37図	財田 2号墳出土 須恵器実測図	26
第38図	延命遺跡調査トレンチ配置図	28
第39図	延命遺跡丘陵下調査区遺構実測図	29
第40図	延命遺跡調査風景	30
第41図	延命遺跡丘陵下調査区ピット群	30
第42図	延命遺跡出土 遺物実測図	31

I 昭和58年度調査概要

四国横断自動車道（善通寺～豊浜）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、昭和57年度の第4四半期に開始して以来2年目を迎えた。

今年度は、昭和58年4月1日付で日本道路公団大阪建設局との間で締結した「発掘調査委託契約書」によって着手した。

調査は、57年度に、1,300m²発掘を行った善通寺インターチェンジ建設用地内で継続実施した。しかしながら、立毛、特に麦・野菜類が発掘調査予定地区全域に植えられおり、旧地権者への了解を得ながらの調査であった。

当所は、金倉川左岸の微高地上に開けた水田地帯で、遺跡の広がりは、おおむね17,000m²と想定されている。今年度は、そのうち約8,000m²を発掘した。それによると、まず、巨大な溝状遺構が注目される。幅10mあまり、深さ2mのU字状を呈しており、ほぼ、N-30°-Wの方向に走る。現在の丸亀平野の水田に認められる方格地割と同じ方位である。いわゆる古代の条里制に基づく地割に関するものかも知れない。この溝状遺構から、「斎車」^{さいしゃ}が出土した。香川県下では、今までに出土例がないだけに、調査員一同色めき立ったものである。「斎車」には、判読不明であるが墨書きが認められている。

また、調査地区のほぼ中央を東西に流れる自然河川を確認した。表土から3～4mも掘り下げたところにやっと川底がみえた。破水帯とも思われる水脈にぶつかり、来る日も来る日も、水と闘い、水に悩まされながらの発掘であった。埋土は複雑な堆積をしており、幾度となく氾濫をくり返していることを語ってくれる。その川底から、「人形」^{じんぎょう}が出土した。木製の人形に罪障災穢の祓い流をする行事は、奈良・平安時代に各地で盛んに行われたといわれ、川や溝などの水脈に、人形は祓い流された。

自然河川北方の微高地上には、(溝状遺構の西側)方形の掘り方をもつ掘立柱建物群がある。切りあい関係になっているものもあるが総計二十数棟にも及ぶ建物跡が確認されている。

当所は、「那珂郡」と「多度郡」の接点にあたっていると想定されるだけに、今後の調査が期待される。

金蔵寺下所から西方へ1kmの所に稻木遺跡がある。稻木遺跡の東西に、方格地割(条里)の痕跡を確認すべく発掘を実施した。路線幅50～60m、東西約1km間に試掘を含め都合5,700m²の発掘を実施した。

発掘調査で現地へ立ち入る前に、日本道路公



第1図 発掘風景（金蔵寺下所遺跡）

団、県教育委員会、地元対策協議会長をはじめ、地元関係者の参加を得て58年5月4日夜、稻木地区地権者への説明会を実施した。席上、論点は、稲の作付けについてであった。発掘調査のために稲の作付けを取り止め、協力が得られた水田から発掘を開始することになり、58年6月29日より発掘調査をはじめる運びとなった。稻木発掘現場事務所も7月1日に開所した。

稻木遺跡からは、溝状遺構を検出した。溝状遺構は、南北方向に走っており、途中より、東西方向に流れているものと合流する様相を呈しているが、合流しているのか分岐しているのか現在のところ不明である。溝の底部から、縄文時代晩期の土器と、弥生時代前期の土器が出土している。

また、国道193号線と土讃線との間の平坦地にトレンチを設定して発掘したところ、弥生土器の包含層を確認した。現在のところ、その広がりは不明であるが、地形的にみると、国道近くまで広がっていると推定される。包含層からは、弥生時代後期の土器が多量に出土している。

用地買収は、予定通りには進行しなかったが、8月に入り、豊中町で発掘調査が出来るメドがついたので、8月10日、町対策室の尽力を得て、財田集会所において、発掘調査の周知会を持つことになった。地元の理解が得られ、9月26日より、財田古墳群の発掘を開始することになった。併せ、現場事務所も完成した。

当該地は、陣山より西に派生した尾根支脈の低丘陵上であるが、茶畑やブドウ畠として開墾されており、古墳を一基確認したにとどまった。この古墳は、径12mの周溝をもった円墳であり、横穴式石室を内部主体としている。開墾時に石室は破壊されているが、床面の敷石を確認した。

11月末には、拠点を延命遺跡に移した。当所は独立低丘陵で、地名として「ジョノカ」(城ノ岡)と呼ばれている。かつて城館か陣屋でもあったと伝えられているところである。

遺構としては、城跡と確認できるものは検出されていないが、溝状遺構や、石組などが検出されており、やがて、全容の解明がなされるであろう。出土品としては、草魚の絵柄をもつ青磁や土器があり、今後の調査結果が待たれる。

四国横断自動車道埋蔵文化財発掘調査事業は善通寺市原田町土居1422番地に善通寺連絡事務所を設置し、そこを本拠地として、17遺跡、8万m²に及ぶ場所を調査することになっている。連絡事務所の敷地、876m²、建物は、プレハブ2F建て(4K×8K×2F)、総床面積260m²。今年度は職員9名、嘱託4名、調査補助員2名、整理員6名、現場作業員120名で、21,000m²の発掘調査を実施している。大幅に遅れている用地買収と、62年開通にむけて急がれる工事の追間にあって、埋蔵文化財発掘調査事業は非常に苦しい立場におかれているといわざるを得ない。(伊沢肇一)

発掘場所	当初契約	変更契約	備考
多度郡条里(善通寺市金蔵寺町下所～稻木・下吉田)	8,700m ²	13,700m ²	古代条里遺構
稻木遺跡(善通寺市稻木町)	300	300	弥生土器包藏地
四ツ塚古墳群(豊中町)	1,000	1,000	石棺群
財田古墳群(豊中町)	1,000	1,000	古墳群
延命山城跡(豊中町)	1,000	5,000	中世山城跡
計	12,000m ²	21,000m ²	9,000m ² 増

II 金蔵寺下所遺跡の調査

1. 位置と環境

地理的環境

香川県の中央やや西寄りに位置する丸亀平野は、阿讃山脈に端を発する土器川と、四国山地に端を発する金倉川によって形成された沖積平野であり、三方を山に囲まれ北に向って開いている。

現在の金倉川・土器川流域の地図を見ると流域付近の地割が著しく乱れていることに気付く。また、昭和54～56年度の四国横断自動車道建設に伴う事前のボーリング調査により、丸亀平野西北部で砂礫層が10数mにわたり、幾層にも堆積していることが確認されている。これは、この地域に過去数回にわたって河川の氾濫があったことを裏付けている。

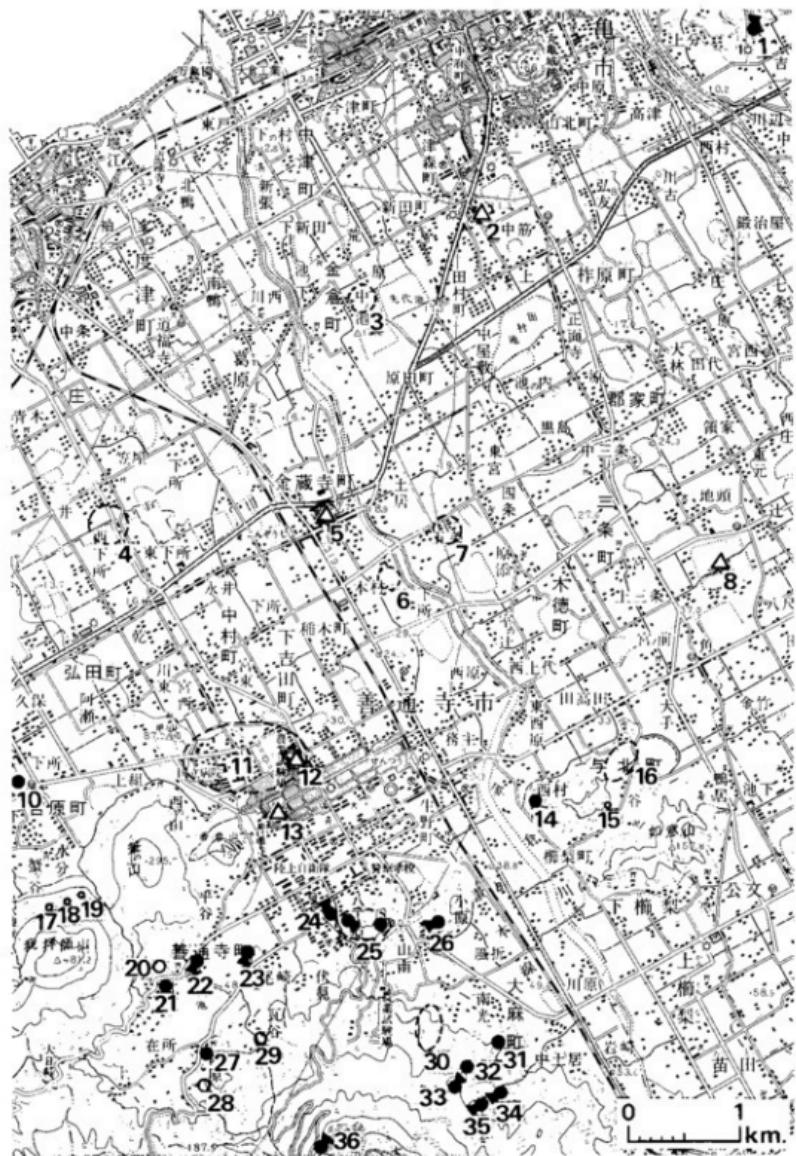
金蔵寺下所遺跡(6)は、丸亀平野の北西部、普通寺市金蔵寺町下所に所在し、金倉川の西岸に営まれている。その標高は20～22mを計り、南から北にわずかに下る微高地地形を呈している。

歴史的環境

丸亀平野の旧石器時代・縄文時代の遺跡については、不明な部分が多いがかつて普通寺市の東部五条遺跡(7)と、同じく中央部の稻木町で縄文時代後期の土器片が出土したといわれている。最近、五条遺跡の調査で縄文時代後期の土器片を、また稻木遺跡(9)の調査で縄文時代晩期の土器片を数点出土している。

弥生時代に入り、多度津町の三井遺跡(4)、普通寺市北西部の甲山遺跡、その他、五条遺跡、稻木遺跡、さらに丸亀市中の池遺跡(3)で弥生時代前期の土器が多数出土しており、この地域が弥生時代の比較的早い頃より開けていたことを示している。中期、後期に入ると、普通寺市の中央部に位置する旧練兵場遺跡(11)をはじめ、大麻山、磨臼山、有岡周辺で、多数の土器が出土している。また、壇棺、組合式石棺が普通寺市内の各所に多数散在していたと伝えられるが実態はいま一つ不明な部分が多い。さらに、平野の西辺を中心として、数点の銅鐸、銅劍、銅鉢が出土しており(15・17・18・19・20・28・29)、この地域の同時代における特色の一つとなっている。

古墳時代には、野田院古墳(36)、大雀経塚古墳、丸山1・2号古墳(33・32)、椀貸塚古墳(34)、経塚古墳(35)などの積石塚が大麻山頂より東麓部にかけて築造されており、「阿讃積石塚分布圏」の東辺を占めている。磨臼山から北原に到る東西約2.5kmに、磨臼山古墳(26)、鶴ヶ峯1、2号墳(25)、北向神社古墳(24)、王墓山古墳(23)、菊塚古墳(22)、北原古墳(21)などの7基以上の前方後円墳が近接し、ほぼ一直線上に築造されている。これらは古墳時代の前期末より後期の中頃までにわたって築造されている可能性があり、まとまった古墳群としても注目される。その他、大麻山およびその周辺には、前期の谷田古墳(31)、後期の熊の巣古墳、瓦谷1号墳、宮ヶ尾古墳(27)や群集墳の夫婦岩・岡古墳群(30)などが点在している。



第2図 金藏寺下所遺跡と周辺の遺跡

丸亀平野の古代寺院は、田村庵寺(2)、宝幢寺(8)、仲村庵寺(12)、普通寺(13)、金蔵寺(5)が知られており、その中で宝幢寺は昭和53年度の調査において塔心礎や基壇が確認されており、また複弁八葉蓮華文軒丸瓦や四重弧文軒平瓦等が検出され、奈良時代前期に創建されたものと考えられている。

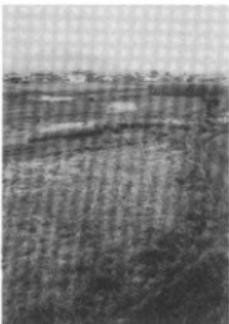
これらの寺院が建立されている現在の丸亀平野は、律令時代の行政区分では、東から「鵜足郡」「那珂郡」「多度郡」に分かれていたと考えられ、郡境はそれぞれ土器川、金倉川と推定させる。金蔵寺下所遺跡は、この「那珂郡」と「多度郡」の郡境付近に位置していると思われる。「那珂郡」は、喜徳郷、金倉郷、郡家郷その他八郷からなり、「多度郡」は、吉原郷、弘田郷、仲村郷、三井郷、その他三郷からなっている。当遺跡の位置は、現在の周辺の地名から推定すると、「那珂郡」の喜徳郷、金倉郷、「多度郡」の良田郷、仲村郷のいずれかにあったものと考えられる。

奈良時代以後、この地には当時の文化・政治・交通に重要な役割を果たした南海道が走っていた。「延喜式」によれば、讃岐国には、六駅が設置されている。このうち、丸亀平野の中には、堺井駅があり、それは現在の普通寺市中村町付近と推定される。

本調査の主眼の一つであった条里制についてみると、現在の丸亀平野には、N30°Wの主軸方位をもつ方画地割が残っており、この地割が奈良時代施行の条里制の痕跡であると考えられてきた。この地域の条里に関しては、「普通・曼荼羅寺所司解」、「徳治二年普通寺一円保差図」の資料等が現存しております、また上に述べてきたように、この地域は弥生時代から中世に到るまで文化がたえたことなく営まれてきた。現在不明な点が多い条里制を研究する上で恰好の地域であると言える。

2. 調査の概要

金倉川の西岸に広がる標高21~22mの微高地上を調査対象地としている。全域を五つの大調査区（I~V区）に分け、一大調査区を100×100mとし、さらに5×5mを小調査区として細区分し、東西にアルファベットを、南北にアラビア数字をつけて小調査区の記号とした。また、調査の進行上20×20mを一単位として発掘を実施したために、調査グリッドの呼称はI区A-1、I区E-5のようになる。なお、グリッドの主軸は真北より振り出している。今年度は、対象地北部に相当するI区、II区それにIII区の一部の調査を実施した。延発掘面積は8,000m²である。



第3図 発掘前の風景

検出し遺構は、建物遺構、土坑、土壤墓、溝状遺構、それに河川跡などであるが、これらは現在の地表下20~100cmで認められる。II区の東半部が近年の土取り作業によって遺構の大部分を失っていると思われるが、I区およびII区西半部は開墾などをうけたにもかかわらず、比較的良好な遺存状況を呈している。検出した各遺構の時期は、I区の南辺部で弥生時代中期の溝状遺構を検出しているが、そのほかのものは奈良時代から鎌倉時代にかけて



第 4 図 金藏寺下所遺跡地区割図

のものと思われる。

建物遺構

調査地区北部で29棟以上を検出している。そのうち、I区I-9を中心として17棟、M・Q-5を中心として5棟が集中して認められる。また、各柱穴の形態は円形を呈するものと、方形を呈するものにわかれれるが、5棟が円形を呈し、それ以外は方形を呈している。

S B8301

I区Q-5で検出した。1×3間(360cm×540cm)の規模をもつ東西棟であり、主軸はN58Wをさす。柱穴は50cm×65cm大方形の掘り方をもつ。

S B8302

I区Q-5でS B8301の南辺に接して検出した。2×2間(280cm×320cm)の規模をもつ。柱穴は30cm~40cm大方形の掘り方をもつ。良好な遺物はない。

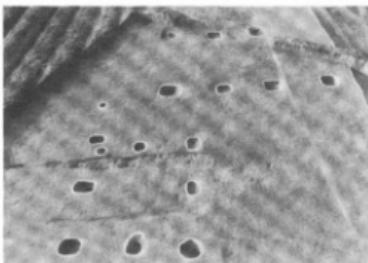
溝状遺構

S D8326

I区I・M-17で検出した。地山土を穿って南より北に向いながらかなかく勾配を呈する落ち肩を検出した。東西方向に流れをもつ溝状遺構の南岸と考えられるが、現在の用水路が直近の北側を東西に流れているために、その北岸と考えられる部分の調査ができなかった。深さ1.5m以上、幅6m以上の規模をもっている。少量であるが弥生時代中期後半の土器が出土している。

S D8301

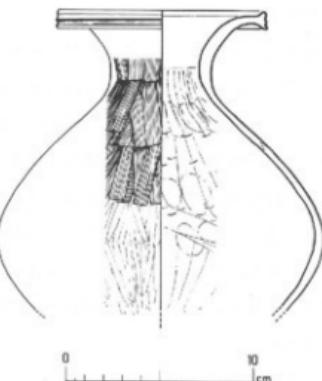
調査地区的北東部で検出した。現在、I区Q-1・5、II区A-5・9にかけて長さ約55mにわたって検出しておおり、おおむねN30°Wの主軸で北に向って流下していると思われる。最大幅10m、深さ約1.6m以上の規模をもつ。断面形は



第5図 S B8301・8302



第6図 S D8326



第7図 S D8326出土弥生土器実測図

ゆるやかなU字形を呈しているが、上半部が後世の開墾や土取りによって削平されていると思われる。土師器椀・小皿、黒色土器椀、瓦器椀、木製品などが出土している。平安時代後半より鎌倉時代にかけての遺構と考えられる。

遺物

土師器（第10図-2・3・4・5）

椀は3点を図化した。2は断面が方形状になる高台を貼り付けている。内外面ともにナデによる調整を施している。3は口径15.4cm、器高5.9cmをはかる。強く外方に張り出した断面方形状の高台を貼り付けている。磨耗しているが外面ともにナデ調整を行ったのちにヘラ磨きを施していると思われる。4は口径14.2cm、器高4.7cmをはかる。内側しながら立ち上った体部外面の上半はナデによって調整しているが、下半部には粗雑な指頭圧痕が残っている。内面はナデによって調整している。口縁端部は内傾しておさめている。小皿は1点を図化した。平底より外反しながら立ち上った体部は、内外面ともにナデによって調整している。口縁部は肥厚し、丸くおさめている。外底部に板目状压痕を残す。

黒色土器（第10図-1）

椀1点を図化した。高台は、斜面下方に張り出すように貼り付けており、端部は丸くおさめている。体部は内側ながら立ち上る。体部外面には幅3mm程度の回転ヘラ磨きを施す。内面には斜面方向のヘラ磨きが一部認められるが、磨耗しているために明瞭ではない。内面と口縁外周に炭素の吸着があり、黒色土器A類の範疇で考えられるものである。口径16cm、器高6cmをはかる。

瓦器（第10図6・7）

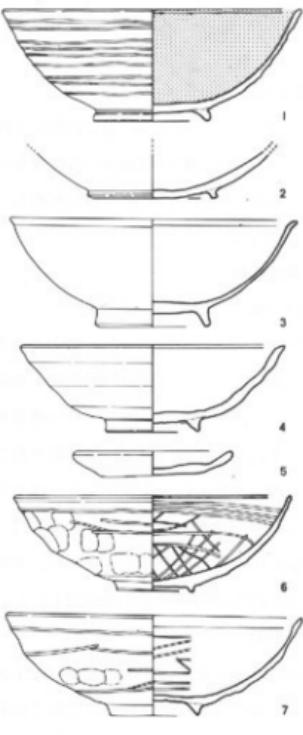
椀を2点図化した。6は口径15.4cm、器高5.2



第8図 S D 8301全景



第9図 S D 8301出土土器



第10図 S D 8301出土土器実測図

cmをはかる。粗雑なつくりの断面三角形の貼り付け高台をもち、体部はゆるやかに内湾しながら立ち上る。体部外面の上半にはナデ調整ののち、ヘラ磨きが施されている。下半部には指頭圧痕が認められる。内面は口縁端部内側に、かすかに沈線がめぐらされている。内底部に細かい格子状のヘラ磨きが認められ、上半部には幅3mm程度の太いヘラ磨きが渦巻状に施されている。7は口径15.8cm、器高5.4cmをはかる。断面が三角形を呈する高台を貼り付けている。体部外面の上半にはヘラ磨きが施されているが、下半部には粗雑な指頭圧痕が遺存する。内面にもヘラ磨きが遺存するが不規則である。

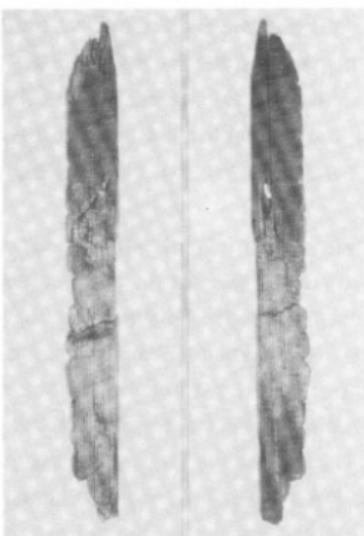
木製品（第11図）

斎串と考えられるものが出土している。斎串と考えられるものは、現存長16.8cm、厚さ0.5cmをはかるが、上下両端と片方の側辺を欠失している。遺存する一方の側辺には、1cm程度の間隔を置いて15ヶ所に切り欠きを施している。一方の面には、判読不明の墨書が認められる。両平面に鋸歯状を呈する極めて細かい線刻が遺存する。

河川跡

S X8301河川

S X8301は調査地区の南西部で検出した東西に主軸を持つ自然河川である。現在までに総延長約40mにわたって検出している。最大幅は約15m、最深部は3mをこえる。S X8301の北岸は安定した粘土であるが、南岸は疊である。東端の土層断面は、下層に黒色化した粘土層が幅約10m、厚さ約1mにもわたり堆積しているのが目につく。上層には疊層がみられる。西端の土層断面の上層は東端と同じく疊層がみられる。それより下層は幅約15m、深さ約1.5mにわ



第11図 S X8301出土木製品



第12図 S X8301河川



第13図 S X8301河川

たって砂層が広がっている。東端でみられた黒色化した粘土層は、幅約2m・厚さ約30cmとなる。

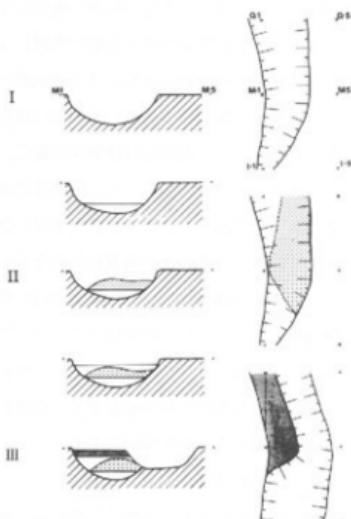
わずか40m区間における断面土層の大きな変化は、この自然河川がたび重なる増水・氾濫を受けその都度流路を変化させたためと考えられる。

現在、確認できる流路は三時期ある。最も古い流路（第I期流路とする。）は、川底である礫の上に暗灰色粘砂質土層が堆積している。この土層の最大幅は約10m、最深部は2mをこえる。（M-1～M-5を結ぶ線のすぐ東側にあたる）。最深部より西側に向かって粘土の幅は狭くなり、厚さも序々に薄くなる。西壁では幅約2m、厚さは約30cmとなる。すなわち、第I期流路は東側から西側に向かってせばまり川底もだんだんと浅くなっている。

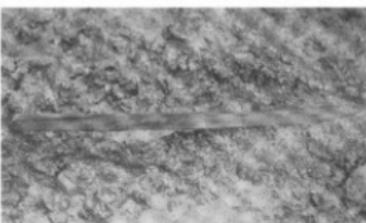
その後、暗灰色粘砂質土層の上に、厚さ30cm程度でQ-1～M-1を結ぶ線の南側に新たに礫層が堆積する。（この礫層はM-1～M-2の範囲で最も厚く堆積している。）この礫層を南側の肩とする流路が第II期の流路である。第II期の流路の川底には暗灰色粘土層が堆積する。

第II期の流路の肩の礫層および暗灰色粘土層の南側を漬し第III期の流路が出現する。赤褐色化（酸化）した礫の広がりが第III期の川底である。第III期の流路は、おそらくM-1～M-2の礫の厚い堆積のために南側に大きく流れを変えたと思われる。西端の断面に見られる砂層は、この時期のものである。

この後も、数回の流路の変化があると思われる。今後、調査は東側に向けて広げていく予定であり、SX8301の流路の変化について、さらに検討を加えていきたい。



第14図 SX8301 流路変遷模式図

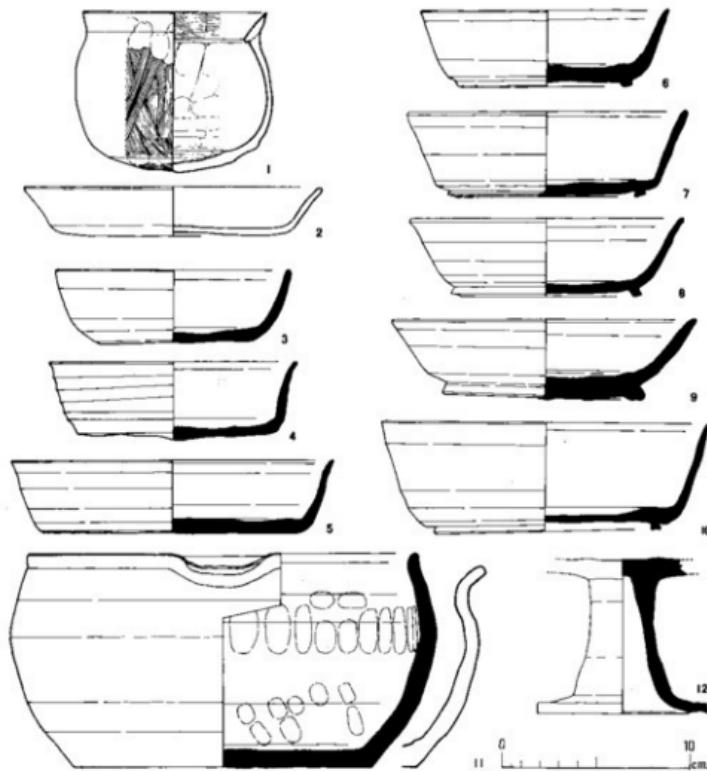


第15図 SX8301 斎串出土状態

遺物

S X8301の遺物は大半が第I期の流れに伴なう暗灰色粘質土層、第II期の流れに伴なう暗灰色粘土層より出土する。土師器の壺・甕、須恵器の甕・杯・椀・鉢・曲物・斎串、人形・船形・刀形・馬形などの木製品、漁具、獸骨等が代表的なものである。これらの遺物は先の両層から出土するが、M-1～M-5を結ぶ線より東側に集中する。それより西側からは、遺物が殆ど出土しない。これは、遺構の稿で述べた第II期の流れにともないM-1～M-2付近に厚く堆積した礫のために、それより東側が、よどみの様相を呈したためと考えられる。また、斎串・人形・船形・刀形・馬形等の祭祀遺物がかなり出土していることから北岸より広がる平坦地は、何らかの祭礼が行なわれていた場所と想定される。

以下、出土遺物について略述する。



第16図 金蔵寺下所遺跡S X8301出土土器実測図

(1) 土 器

土師器 (第16図 1・2)

第16図 1・2は、第I期の流れより出土した遺物である。

1は器壁内外面ともに煤が付着したために黒ずんだ壺である。口径9.8cm、最大腹径は体部中央である。頸部は外反しながら立ち上がり、頭部内面および体部外面はハケで調整されている。

2は口径16cm、器高2.8cmを計る皿である。口縁は、体部中央よりやや外彎しながら立ち上がる。胎土は0.2~1mmの微砂粒をわずかに含む。器壁内外面は磨耗をうけているために明確ではないが、ナデ調整が施されていると思われる。器壁内外面ともに赤色顔料を塗布している。

須恵器 (第16図 3~12)

3~12は須恵器である。5は第II期の流れより出土した遺物だがそれ以外は、第I期の流れよりの出土である。

4は口径13.2cm、器高4.2cm、外底径10.3cmを計る杯である。暗灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は精緻で微砂粒をほとんど含まない。体部外面の稜線が極めてはっきりとしている。

底部の形はほぼ正円であるが、体部上位より口縁部にかけて大きく歪んでいる。器壁内面および体部外面はナデ調整を施しているが、底部外面は粗雑な仕上げである。

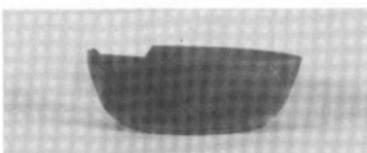
5は第II期の最上層より出土した杯である。口径17.2cm、器高4.9cm、外底径14.0cmを計る。淡黄灰色を呈し、焼成・胎土ともに良好である。口縁は体部上位で若干外反する。器壁内外面ともにナデ調整を施している。

6は口縁部および高台の破損が著しい杯である。口径13.2cm、器高4.1cm、内底径9.2cmを計る。灰色を呈し焼成はふつうである。胎土は0.1~2.5mm程度の微砂粒を多量に含み粗い。体部内外面に横ナデを施す。

10は口径17.4cm、器高6.0cm、内底径13.8cmを計る杯である。暗灰色を呈し、焼成は良好で胎土は精緻である。体部外面は自然釉が付着し黒色化している部分が多い。器壁内外面ともにナデ調



1



2



3

第17図 S X8301出土土器

整が施され、底部内面には指頭圧痕がみられる。高台は形をよく整えて貼り付けている。

11は口縁の一部を折り曲げて片口を作りだしている鉢である。黒灰色を呈し、胎土は0.3~1mm程度の微砂粒を含み他の須恵器と比較して粗い。口径20.6cm、器高11.5cm、外底径16cmを計る。最大腹径は体部中央である。体部内外面はともにナデ調整を施し、内面には指頭圧痕が著しい。体部は底部よりゆるやかに内瓣しながら立ち上がる。底部の仕上げは内外面とともに粗雑である。

(2) 漁具(第18・19図)

S X8301の現在までの調査で出土している漁具は土鍤、蛸壺である。土鍤1点が第II期の流れより出土している以外は、いずれも第I期の流れより出土している。

土鍤(第19図3~6)

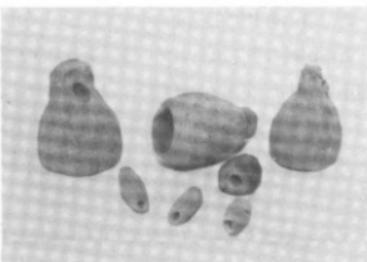
4点を図化した。第19図3~5が小型管状土鍤で、6が大型管状土鍤である。3~5は、ほぼ完型で6は半分が破損していると思われる。胎土は4~5が比較的精緻である。3は約0.3~1mmの微砂粒を含む。6は約0.3~2.5mmの微砂粒を3よりも多量に含む。色調は6が黒灰色を呈している。3~5は赤褐色である。

蛸壺(第19図1・2)

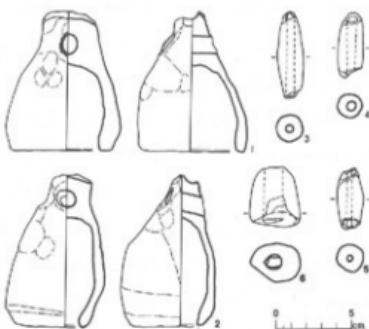
完型は3点である。2点図化した。いずれもほとんど磨滅をうけていない。色調は赤褐色を呈している。胎土は2に比較して1の方が微砂粒をわずかに多く含んでいる。

(3) 木製品

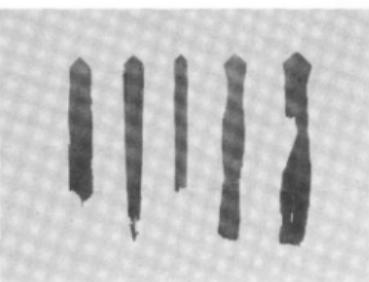
I期・II期の流れより木製品が多量に出土する。斎串・人形・馬形・船形・刀形・曲物・串などである。総数は約300点におよぶと思われる。このうち斎串・人形などの祭祀関係遺物が半分以上を占める。



第18図 SX8301出土漁具



第19図 SX8301出土漁具実測図



第20図 SX8301出土斎串

斎 串 (第21図1~8)

斎串が最も多く出土している。実数は現在整理中であるため明確ではないが、100点ははるかにこすと思われる。そのうち8点図化した。大きさ・形・切り掛けの部位・切り掛けの回数などがそれぞれ異なる。⁽¹⁾

1は下半部を欠失しているが切り掛けはない。2~3は側辺上位に切り掛けがみられる。

4は上端の主頭部の形状から2~3よりかなり大きいことが想像できる。切り掛けの回数も一箇所ではないが、側辺上位にのみ切り掛けが見られる。5は側辺上位から肩部にかけて下方からの切り掛けが数箇所みられる。6は完型で全長35.9cmである。上位の切り掛けが下方より、また下位の切り掛けが上方よりなされている。

人 形 (第21図9)

第21図9は人形である。現存長9.8cm、厚さ約1.5mmで、その一面に「まゆ」・「め」・「くち」の表現（墨書き）が認められる。これ以外に1点人形の可能性が残るものがあるが、現時点では明確ではない。

刀 形 (第21図10)

刀形は3点出土している。1点図化した。10は鉄製の刀身を模したものであろう。刀身の先の部分だけが残る。刀背は直線に通り刃の部分は、ゆるやかな弧状に作られている。

馬 形 (第21図11)

馬形は11の1点である。現存長は14.7cmで半分が破損した状態であろう。下辺に2ヶ所の切り込みを持つとして復原長は約30cmとなる。馬形としては大型化しそぎるので、11は馬形の可能性が強いということで、今後検討したい。

船 形 (第21図12・13)

船形は4点出土し、2点図化した。12・13は



第21図 SX8301出土斎串・木製模造品実測図

ともに丸木船を表現したものと考える。両端部を尖らせ上面に12は2ヶ所、13は1ヶ所の切り込みを施している。自然木の外形を多く残している。

注(1)

(1) 黒崎直氏の分類によると、1はA₁になると思われる。2～3はB₁に相当する。4はB₁の可能性が強い。5はB₂の範疇で収まると考える。6～8はDに相当するが、7は切り掛けの方向が他の2点とは異なる。

黒崎 直 「斎串考」 (『古代研究』 第10号 1977)

3. まとめにかえて

試掘の成果と現地形を考え合わせて約17,000m²を対象地とし、今年度はそのうち約8,000m²の調査を実施した。その結果は、おおむね次のように要約できる。

- 北半部に相当するI・II区の旧地形は微高地状を呈しており、ここには弥生時代中期から鎌倉時代前半にかけての遺構が認められる。また、この微高地上には、部分的に客土が行われており、その上に設けられている遺構がある。
- I区I-9, M・Q-5を中心として検出した20棟以上の建物遺構は良好な遺物の出土はないが、柱穴は方形の掘り方をもっており、奈良時代を中心とした時期に建てられた可能性がある。また、各建物遺構の重複するかたちや主軸方位から数回にわたる建て直しが考えられる。
- N30°Wの主軸方位、あるいはそれに直角の主軸方位をもつ溝状遺構が多数認められる。これらからは奈良時代を中心とした時期の遺物や平安時代後半を中心とした時期の遺物が出土する。
- 平安時代末から鎌倉時代前半にかけてのものと考えられる大溝があり、おおむねN30°Wの主軸方位をもつ。
- 奈良時代の自然河川が微高地南辺に認められ、斎串、木製模造品さらに、赤色顔料を塗布した土器など祭祀に使用したと考えられる遺物が出土する。この河川は中世前半頃には埋ったと考えられ。

調査着手前にこの遺跡周辺で少量の弥生土器が出土し、一部の人々にそのことが知られていた。今回の調査によって遺跡の範囲や時期が明らかになり出してきた。香川県で最も広い沖積平野である丸亀平野には、古くから弥生時代の遺跡が知られており、この地域にも同時代の遺跡が広範に存在することは充分に予想されたことである。今回の調査の目的の一つに、丸亀平野にN30°Wの主軸方位をもって遺存すると考えられている条里制の確認があった。ほぼ、その主軸方位をもつ遺構も検出しているが、今回さらに奈良時代を中心とする時期の建物群や、同時期のものと考えられる祭祀遺物が大量に出土したことによって、以後の調査にはさらに違った観点を必要とするものとなった。

(廣瀬常雄・薦田耕作・河野 裕)

III 稲木遺跡の調査

1. はじめに

普通寺市稻木遺跡は、弥生式土器片や土師器の出土地として知られていた。「普通寺市史第一卷」では、遺跡の範囲を吉田八幡神社を中心とした稻木町・下吉田町・金蔵寺町下所付近とし、同神社の南東地で繩文時代後期の土器片の出土も紹介している。本遺跡の東南には四国農業試験場構内（旧練兵場跡）・甲山、西北には中村・三井等の周知の弥生時代の遺跡がある。またこの一帯には、条里制にもとづくと推定される古代の方画地割が現地形に遺存している。稻木町・下吉田町は、古代の「多度郡良田郷」の一角であり、良田（ヨシダ）の地名は地味が良いことに由来するといわれている。

（岸上 康久）

2. 調査の概要

試掘調査

調査対象区は、国道319号線から市道都市計画街路大通線の間で、県道西白方普通寺線を東南から北西に交差する、長さ1.2km、幅60mの範囲である。地字でいえば、金蔵寺町字下所、稻木町字下川原・西角、下吉田町字本村東・下所東・下所中・下所西である。丸龜平野の西方に位置し、標高は20m強で、最高所で22.6m強、最低所で18.5mを測る。全体に南から北へゆるやかに傾斜しており、宅地・休耕転作地以外はすべて水田として利用されている。

発掘調査は6月29日から開始し、第22図のように、休耕地を利用して11ヵ所で試掘調査をした。その試掘結果にもとづき、10月12日より本調査に移った。発掘面積は、試掘調査で1,200m²、本調査で4,800m²、合計6,000m²である。以下、試掘の成果の概略を述べる。



第22図 稲木遺跡試掘トレンチ配置図

[1トレンチ]

標高21.5m前後の高さで、弥生時代後期後半の土器包含層を検出した。この段階で遺構は確認できず、土層の状態から流れ込みとみられる。土層は耕作土の下に須恵器を含む黄褐色砂礫層があり、さらに遺物のない砂層の下に、疊まじりのこげ茶色粘質土が50~60cmの厚さであり、ここに弥生時代後期後半の土器が大量に含まれる。包含層の下は、頭大の石・疊・砂が混合あるいは単一に続いている。現在の金倉川の西300mに位置するが、国鉄土讃線の近辺は砂・疊の層が厚く、南北に過去の河道か氾濫原であったとされている。

[2・3トレンチ]

耕作土の下の黄褐色砂質土は、須恵器もあるが新しい遺物も含み、量も少ない。またその下層は、一部に灰色土もみられるものの、砂・疊が多く、50cm前後の厚みで層も混乱している。さらにその下には黄褐色あるいは茶黒色の粘土層がある。粘土の上の砂礫層は河川の氾濫によるものと思われる。現在もこの東西に用水が流れている。

[4・5・6・7トレンチ]

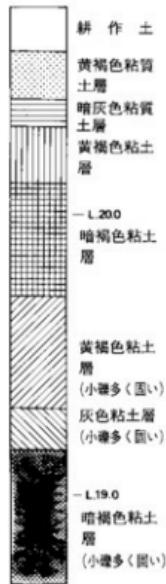
確かな遺構を検出したのは、標高20m前後の黄褐色粘土層である。5トレンチでは、暗灰色粘質土から黄褐色粘土層を掘り込む、北より西に30度振った南北方向の溝状遺構を検出した。6・7トレンチでは、同じ粘土層の上面に掘られたピット群、さらに7トレンチではピット群の下方に黄褐色とその下の粘土層まで掘り込む溝状遺構を検出し、その黒色がかかった埋土からは弥生時代前期の土器が出土した。4トレンチの土はやや砂質がになっているが、これら一帯の土層は共通している。上から耕作土、黄褐色粘質土、やや粘質の暗灰色土、黄褐色粘土に大別できる。遺物は、黄褐色粘質土に石庖丁・石鏟・須恵器・土師器・黑色土器・土鍋等の小片が混在するが、暗灰色粘質土には須恵器・土師器が集中して出土する傾向がみられる。遺構が刻まれる黄褐色粘土からの遺物出土は皆無である。地形は、4トレンチ近辺から西へゆるやかに下がっている。

[8トレンチ]

耕作土の下の褐色土、灰色土は砂質がになっている。その下の乱れた土層から、南北方向の溝を検出した。このトレンチ近辺は、東西方向からみれば最低地である。1トレンチ周囲のように大きく厚い石や疊の層はみられず、古代の自然河道と推測できる。現地形でも、南の吉田八幡神社付近にいくつかある出水の流路になっている。

[9・10・11トレンチ]

第二次世界大戦後地下げをして、耕作土の下がすぐ黄褐色粘土であったり暗灰色粘質土がないなど、やや土層に違いはあるが、遺物は極めて少ない。東の8トレンチ方向にゆるやかに下



第23図 6トレンチ
土層柱状図

がっている。

以上の試掘の結果、本調査の焦点は次にしばられた。

- ① 1トレンチで出土した弥生時代後期後半に編年できる土器包含層の発掘と遺構の検出。
- ② 5トレンチで検出した溝状遺構の調査。
- ③ 6・7トレンチで検出したピット群の調査。
- ④ 7トレンチで検出した溝状遺構の調査。

1月末現在、③・④についての発掘調査はほぼ終了した。以後①について発掘中である。(岸上)

主な遺構について

S D8301・04・05・8412溝状遺構

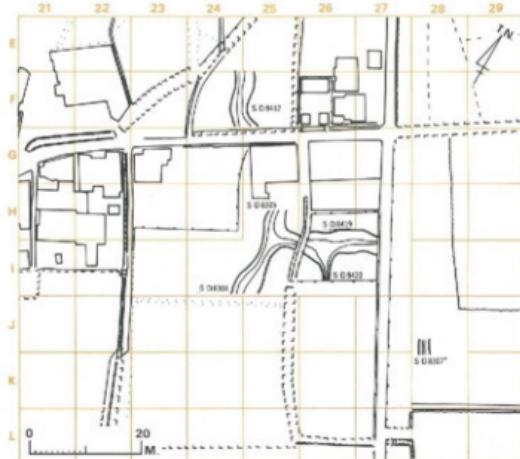
市道稻木線より西方30mの地点に26-Jグリッドを設定した。ここより数本の溝状遺構を検出した。検出した溝状遺構に個別の遺構番号をつけて呼称するが、これらは本来同一の遺構と考えられる。以下、略述する。

S D8301

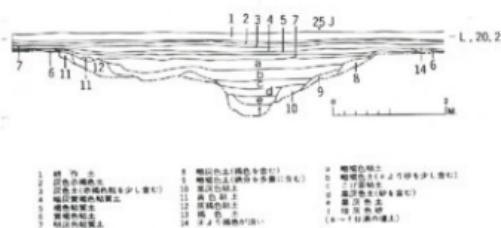
上端部幅5~6m、下端部幅0.8~1m、深さ1.1~1.2mの規模をもつものである。溝は「U」字形の断面形を呈しており、底部の幅が上部幅の $\frac{1}{5}$ 程度である。東肩部にテラス状の平坦部が形成されており、二段に作られた形状をしている。埋土は底が砂礫を含んだ砂土であるほかは、有機物を含んだ暗色の硬い粘質土であり、おだやかな状況で埋まったと考えられる。

S D8304

上端部幅3~3.2m、下端部



第24図 稲木遺跡遺構配置図



第25図 稲木遺跡 S D8301 土層図

幅1～2m、深さ0.7～1.1mの規模をもつものである。埋土はSD8301と同じ状況を呈している。南肩部に流れ込みの様にゆるい傾斜の落ち込みがあり、自然の浸食によるものと考えられる。

S D8305

上端部幅3.5～4m、下端部幅0.4～0.8m、深さ1.2～1.3mの規模の溝である。埋土は他の2本の溝と同様に有機物を含んだ暗色の粘質土である。

S D8412

S D8305は北からの流れをもつとも推測され、その延長の状況を確認するために、県道西白方普通寺線の北側に25-Fグリッドを設定し、溝状遺構（S D8412）を検出した。上端部幅2～4m、下端部幅1.3～1.6m、深さ0.8～0.9mの規模をもつものである。断面形は上部が開いた台形状を呈しており、埋土もほかの溝状遺構（S D8301・04・05）と同様である。

また、このグリッドではほかに5本の溝が確認されたが、きわめて小規模であり、S D8412とは異った性格をもつものと考えられる。

このS D8301・04・05・8412は出土遺物より弥生時代前期を中心とした時期につくられたと考えられるが、検出した部分の総延長が約80mと短かく、その性格については、今後検討が必要であろう。

S D8307

5トレンチにおいて、幅2.3m・深さ0.5m程度の溝状遺構を検出した（S D8307）。S D8307はN30°Wの主軸方向をもっており、丸亀平野に考えられている方画、地割の方向に一致したものであり、今後の調査によってその状況が明らかになる可能性を含んでいる。

ピット群

ピット群を検出した。25-Iグリッドで346穴、26-Jグリッドで110穴、総数は456穴である。このピット群は4ヵ所に方向の規則性が認められるが、ピット群における各ピットの形状・分類



第26図 稲木遺跡 S D8301・04・05



第27図 稲木遺跡ピット群

などの緻密な検討が現在のところ不十分なため、性格は明らかでない。なんらかの施設に伴う棚列状遺構とも考えられるが、不明である。

(中本 雅之)

遺物

(1) S D8301~05出土の遺物

遺物はコンテナ(28l)に1箱と少ない。土器は破片がほとんどである。遺構の埋土が粘土質の土壤のために表面が荒れているものが多い。石器は打製石斧と不定形刃器が各1点で、ほかは剝片が少量である。

縄文土器 (第30図1)

1は壺の体部上位から口縁部の破片であると思われる。体部外面の引摺状の細線は粘土接合痕であろう。口縁端面に刻み目、内外面ともにヨコナデ調整、口縁部外面全周と内面にスヌ付着、色調は黒褐色である。口縁端面の刻み目などにより縄文土器と考えられる。

弥生土器 (第30図2~12)

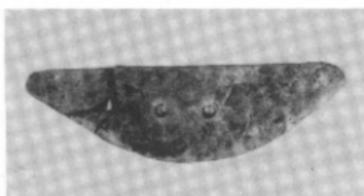
広口壺・壺用蓋がある。2・3はなだらかに外反する口縁部をもつ広口壺である。3は肩部に重弧文をもつ。4・5は大型の広口壺になるとと思われる。4は頸部になだらかに高まる段をもつ。内面の口縁部と頸部との境界に凹線状の窪みを持つ。5は頸部上端に段がつくられ、その下には強くヨコナデを加えて段を強調している。外面はヘラミガキ仕上げ。6・7・8は口頸部破片と思われ、いずれも段をもつ。8は削出しによるとと思われる段をもち、段の上には1条の沈線がめぐる。内面には4条以上のタテの直線をもつ。段を有する4~8の土器は弥生時代前期に属するものであると思われる。9は刺突文をはさんで2本の沈線がめぐり、その下には2条の浅い沈線による「八字文」をもつ。10は壺用蓋である。突出するつまみ部は皿状に深く凹む。端部は平坦である。体部内面に炭化物が付着している。11・12は底部とともに、大きな平底で、中央部がやや凹む。

(2) S D8412出土の遺物 (第30図13)

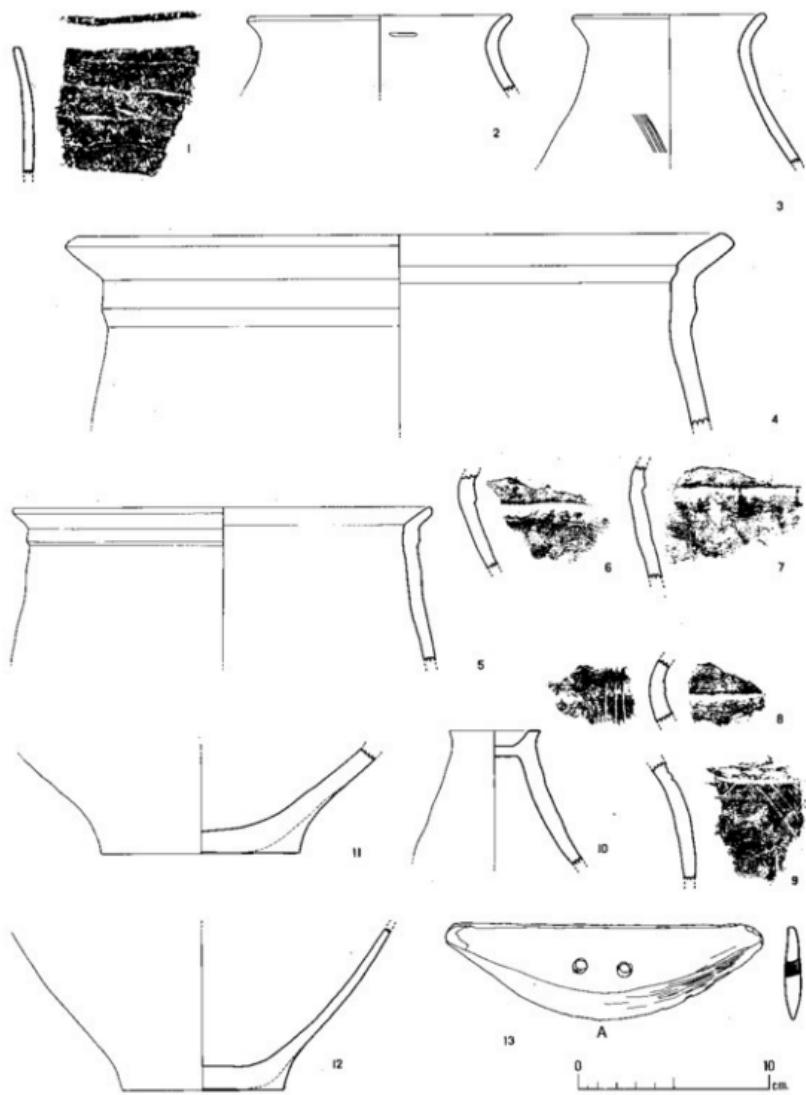
未整理である。石庖丁についてのみ記す。13は半月形外彎刃(両刃)である。A・B面ともに右側先端から $\frac{1}{3}$ 程の間に刃部沿いに研磨を加えて鋭いエッジを得ている。これは砥ぎ跡であろう。紐穴は背部側に寄せて、ややアンバランスであるが中央部に穿たれている。両面から穿孔され、錐先は反対面の孔径の端部をねらっている。A・B面ともに、紐穴の背部側の端に磨滅痕が残っている。



第28図 稲木遺跡出土 縄文土器



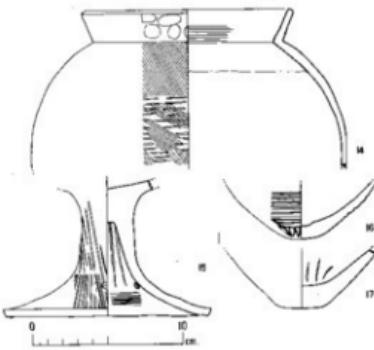
第29図 稲木遺跡出土石庖丁



第 30 図 稲木遺跡出土 遺物実測図 (1)

(3) 1-N S トレンチ出土の遺物 (第31図)

18m²の発掘でコンテナに約5箱の遺物が出土した。遺物はすべて土器である。14は体部下半を欠くが甕と思われる。外面肩部はヨコ叩きの後、斜めハケ仕上げ。肩部以下はヨコ叩きの後、やや屈折する斜めハケ仕上げ。ハケ調整が疎であるため叩き痕が残る。15は高杯の脚部である。外面脚部はタテハケ、柱状部はタテヘラミガキ仕上げ。内面柱状部に紋り痕、脚部はヨコハケの後、ナデ仕上げ。端部内外面ともヨコナデ、外面には脚部のハケが及ぶ。端面はヨコナデ仕上げ。焼成後、4穴が穿孔されている。16・17は底部で、体部が大きくひらくのに比較して非常に小さく、底部外面が凸状にやや高まり不安定である。16の底部外面はタテ叩き、体部はヨコ叩きの後、ナデ調整を加えている。胎土に金雲母を多く含む。以上の土器は調整手法形態などより弥生時代後期に属するものと思われる。



第31図 稲木遺跡出土遺物実測図 (2)

(野中 寛文)

3.まとめ

7トレンチで検出した溝状遺構の延長を、県道の北と東の26-Iでも検出した。溝状遺構の埋土からは、弥生時代前期の土器と、溝底で縄文時代晩期の土器数片が出土した。弥生時代前期を中心とする時代に掘削した溝状遺構と推測しているが、出土遺物の量は少なく、近くで溝状遺構に関係すると思われる遺構も検出されず、その機能や性格はまだ明らかでない。市道稲木線の東に延びる可能性があり、5トレンチで検出した溝状遺構の発掘と含めて、今後の調査の重要な課題となっている。

6・7トレンチで検出したピット群は、弥生時代前期と思われる溝状遺構の上層にあり、ピット埋土の遺物も時代検討には不足で、並び方に部分的な計画性が認められるものの、性格は不明で、さらに今後の検討を要する。

1トレンチ周囲の弥生時代後半の土器包含層は、遺物の量が極めて多く、期待がもてる。平野部の水田地帯の発掘であるので水路や畦畔、それに横断道路幅などの制約があるが、以上のように、稻木遺跡の発掘調査は大きな成果をおさめつつ進められている。(岸上)

IV 財田古墳群の調査

1. はじめに

財田古墳群は、三豊郡豊中町上高野財田に所在する。当所は豊中町の南東部に位置し、同町と高瀬町との境に聳える陣山（標高133m）から西に派生した標高約40mの丘陵上にある。ここは、七尾の名が示すように派生した尾根が起伏したり分派しながら、ゆるやかに下がり中央低地（三豊平野の一部）に及ぶ。豊中町東部の丘陵地の一つであるこの丘陵からは、七宝山系の山並や燧灘が一望のもとに見渡せる。豊中町内では、旧石器・縄文時代の遺跡は現存まで確認されていない。

弥生時代前期の遺跡としては観音寺市室本が知られている。町内には弥生時代中期初頭に位置づけられている岡本遺跡がある。この遺跡は七宝山の山裾部にある不動の滝を要とし扇状形に展開しており、前述の室本遺跡から東約3kmほどの所にある。両遺跡の関係が注目される。さらに天神山丘陵（標高81m）・笠田笠岡の低台地・中尾片山の丘陵上台地にかなり広範囲に亘って弥生土器、石器の分布が知られている。

古墳時代では前方後円墳の分布密度が高い香川県にあって、この三豊郡は前期古墳の分布がきわめて少ないと特徴があげられる。周濠をもつ前方後円墳の御本祖古墳、埴輪出土の大塚古墳（円墳）は、中期段階の有力豪族の古墳であると考えられる。後期古墳では東部地域の原谷古墳群、野津午古墳群、道上古墳、四ツ塚古墳群、延命1号墳（玄室の奥行き4.35m・幅2.5m・高さ2.8m）での地域では珍しい片袖式の横穴式石室を有する円墳）や西方の七宝山山裾部の堂の前古墳、小丸古墳群、帰来1号墳、2号墳が造営されている。しかしその規模はいづれも小さく分布密度も散漫的で後世の開墾等でほとんど破壊されている。

- 1 室本遺跡
- 2 岡本遺跡
- 3 天神山遺跡
- 4 御本祖古墳
- 5 四ツ塚古墳群
- 6 財田古墳群
- 7 延命1号墳
- 8 道上古墳
- 9 妙音寺跡
- 10 延命遺跡



第32図 財田古墳群と周辺の遺跡

歴史時代では、この地域を代表する遺跡として妙音寺と道音寺があげられる。前者は、十一葉單弁軒丸瓦（高勾麗系古瓦）、八葉單弁軒丸瓦（山田寺式）等が出土しておりその創建年代は白鳳期に遡るものであると推定されている。道音寺からも平安京出土瓦と同形のものが出土している。両者とも近くに瓦窯を2、3窯ひかえている。

さて、以上のような歴史的環境の中に財田古墳群は位置するわけであるが、古墳所在地付近を四国横断自動車道が通過することになり、事前調査を実施することになった。

現地での発掘作業は昭和58年9月26日から開始され、後述する2号墳の一部と、福岡神社社地を除き、同年11月24日に一応終了した。発掘総面積は約1,900m²である。

2. 遺構

調査対象地は、ほぼ南北に細長く延びる東西2本の尾根からなっている。

西尾根では尾根頂部・斜面に10ヶ所のトレンチ（第2図）を設定して調査を行った。

代表例としてDトレンチの土層について概略することにする。

表土から地山までの平均的な深さは40~60cmぐらいで土層は大別して4層に分けられ尾根筋から20mぐらい下で細かい堆積になる。

上から第1層-黒褐色土層（表土）、第2層-黄褐色砂質土層できめの細かい風化土、第3層-茶褐色砂質土層でやや粒の粗い風化土、第4層-明褐色粘質土層（地山）となっている。

出土遺物は、Fトレンチの第2層より弥生土器、須恵器が数点出土したのが目立つくらいである。その他のトレンチでは、



第33図 財田古墳群調査トレンチ配置図

現代の陶磁器を含め近世以後のものがほとんどであり須恵器片がわずかに出土するのみで、この尾根には頗るな遺跡があったとは思われない。

次に東尾根であるが、I・Jトレンチでは近世～近代にかけての生活址を検出し、Kトレンチではかなり破壊をうけた古墳を検出した。財田2号墳と呼ぶことにする。

2号墳の墳丘はほとんど削平をうけており、地山を整形した墳丘基底部が高さ60～80cm残存していた。周溝は北西部に残っていた。上幅1.6m、深さ0.4mである。周溝から墳丘規模を復原すると径13mの円墳であったと推測できる。石室は自然塊石を積み上げた横穴式石室であったと思われるが、側壁の石は基底石まですべて抜き去られており、正確な規模は明らかでない。しかし、基底石の据えつけ穴が残存していたので、これから推測すると、玄室幅1.1～1.2m、長さ4.5mに復原できる。羨道についてもすべて石が除去されており、基底石据えつけ穴も残存していない。地山が幅1.3～1.6m、深さ2～3cmのU字形の溝状に掘りこまれている。これから推測すると羨道は長さ3.5m、幅0.9m程に復原できる。

石室は幅の狭い細長いものだったようだ。石室型式については、現在玄門部を精査中のため不明である。石室床面には3～5cm大的玉砂利が厚さ約5cmにわたって残っていた。砾床とみなしてよいだろう。この砾床の下には、大きさ20cmぐらいの上面平坦な石が部分的に見えている。これが築造時の床面かもしれないが、羨道部の精査では排水溝が検出されなかったことを考えると、玉砂利下の石は排水施設を兼ねた基礎構造とも考えられる。この点についても現在



第34図 財田古墳群調査風景



第35図 財田2号墳全景



第36図 財田2号墳石室床面

精査中のため、調査結果は正式報告に譲ることにする。

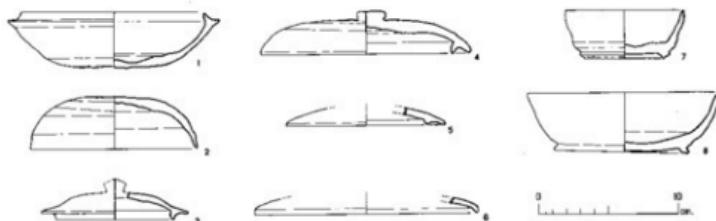
3. 遺物

財田2号墳からは下記のように多数の遺物が出土した。

1. 須恵器（甕4、壺9、杯身8、杯蓋6、台付杯2、高杯3、平瓶1、提瓶1）
2. 土師器（甕1、高杯2）
3. 鉄器（釘、鉄斧1）
4. 装身具（銀環1、管玉1）
5. 弥生土器
6. サヌカイト片、石鐵

須恵器、土師器の器種名と数量は、現在整理中のため、概略を記している。

これらの遺物の出土状況を述べると、まず石室内からは、須恵器杯1～2、壺1、鉄釘、鉄斧、銀環が出土した。前述したように石室内は疊床の直上まで擾乱をこうむっていたので、原位置を保っていないとみなした方がよからう。その他の遺物は削平をうけた墳丘上や、墳丘外からの出土で、特に、墳丘外南西部に、幅1m、長さ6mにわたって帶状に須恵器類が集中していた。この土器類は、現耕作土と地山との中間層に包含されているもので、土器集中箇所に瓦片が1点混入していたことなどから判断して、明治期の開墾時に石室内からこの位置に移動されたのは明らかである。弥生土器は少量で、底部1点と口縁部1点の他は細片である。口縁部の形状からみて弥生時代中期末～後期初め頃のものであろう。今回は須恵器杯類の主なものを図化した。1の杯身が出土須恵器の中では最も古いもので、量的にもこの時期のものが多い。6世紀末頃に位置づけてよからう。最も新しいものは、6と7で7世紀末頃のものだろう。



第37図 財田2号墳出土 須恵器実測図

4. おわりに

調査を実施した丘陵地帯には4基の古墳があるとされていた。2号墳の西側の尾根頂部には町道が走り、未調査ではあるが、斜面のトレンチでの遺物出土状況からみて、古墳は営まれていな

かったとみてよいだろう。但し現在福岡神社の祠のある地点は、古墳状の地形隆起があり、かつて石が3つ残っていたとのことで、古墳の可能性が大きい。買収・神社移転後、確認調査が必要である。2号墳の南80mに尾根の高まりがあり、ここにも石が埋っているとの伝承があり、古墳の可能性がある。また、北方尾根頂部から開墾時に壺が出土したという伝えがあるが、弥生時代のものか、古墳のものは判然としない。これ以外には古墳と思われる場所はないため、この位置は3~4基からなる小規模な群集墳が営まれていたと考えられ、2号墳はそのうちの1基との位置づけが可能である。この古墳群の北方1kmには、次年度調査予定の四ツ塚古墳群があり、これも名称から数基からなる群集墳と推定され、南の延命丘陵には延命古墳群がある。豊中町東部の丘陵地には数基からなる小規模な群集墳が点在しており、財田川をはさんで南にある数十基からなる母神山古墳群とは対象的である。

2号墳は、墳丘が削平され、石室もかなり攪乱をうけていたが、床面は残っており、須恵器も多く得られたのは大きな成果であった。

石室は幅1.1~1.2mとなかり幅の狭い点に特徴がある。砾床に使用されている玉砂利は比較的小さな石で、この点も特徴の1つにあげてよからう。須恵器類は6型式認められ、追葬の回数も今後検討が必要だろう。2号墳が追葬に使用されている時期に、妙音寺が建立されており、2号墳の成果は、この地域の歴史動向を知るうえで、貴重な一資料になるだろう。

(大山真充、池内右典)

V 延命遺跡の調査

1. はじめに

延命遺跡の調査は四国横断自動車道建設に伴うもので、昭和58年11月25日から開始され現在も継続中である。延命遺跡の調査予定面積は5,000m²である。2月1日現在で丘陵下に設定した3本のトレント及び拡張区で850m²を発掘している。

発掘地点は、三豊郡豊中町上高野大地に所在する「延命の丘」と通称される独立低丘陵の西北端に位置し、「城岡（じょのか）」と古くから呼ばれている場所である。ここは、室町～戦国時代にかけて多度・三野・豊田郡を領有する香川氏輩下の香川右馬助の拠城である高野城に關係する居館であると言われているが、高野城跡を城岡の北東1.5kmに位置する陣山に比定する説や、そこから南西に派生する丘陵上に比定する説などさまざまであることから、今回の調査が文献史料にあまり名を残さない高野城の姿を浮き出すものとして重要視されている。

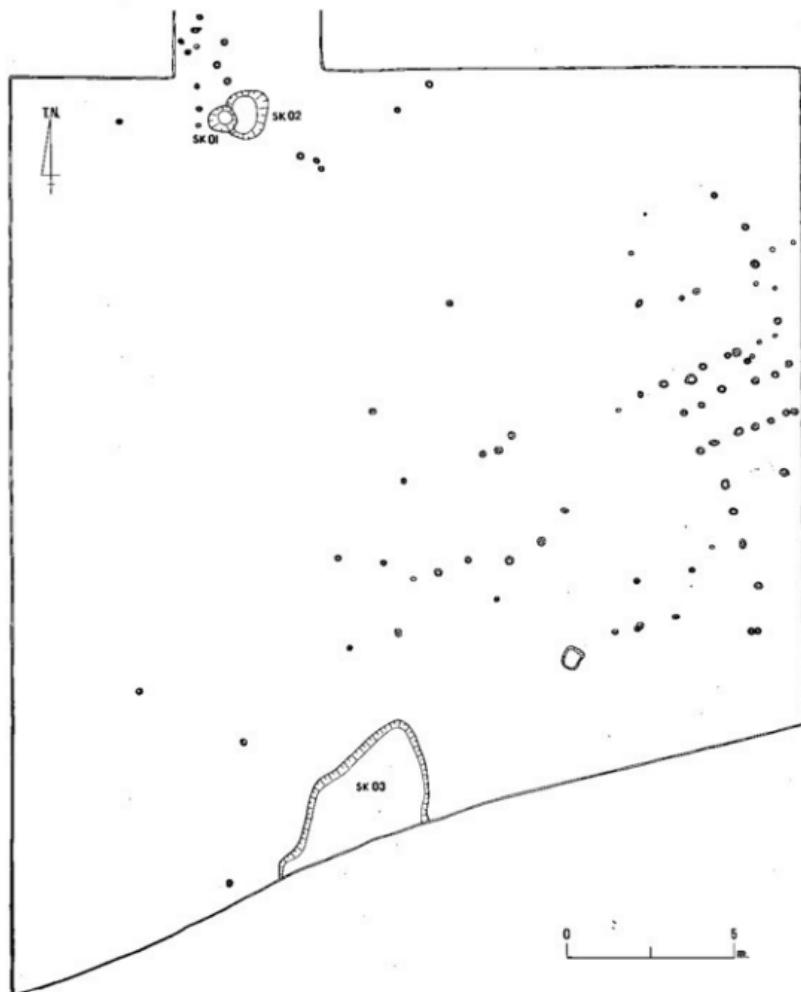
今回は丘陵下についてのみ報告するが、丘陵上から検出された遺物についても数点を取り上げて紹介しておきたい。



第38図 延命遺跡トレント配置図

2. 遺構

調査地区は丘陵上の平らな畠地と、丘陵下の宮川の旧河川敷と推定される畠地の2ヶ所である。



第39図 延命遺跡丘陵下調査区遺構実測図

当初、丘陵上に 5×50 m のトレンチを 4 本、丘陵下に 3×45 m のトレンチを 3 本設定した（第 1 図）。調査途中のため、今回は丘陵下に設定した 3 本のトレンチ及び拡張区についての調査結果を報告する（第39図）。

第 2・第 3 トレンチ間で検出された遺構面は、耕作土・床土・第 3 層・第 4 層下の第 5 層（砂層）に掘り込まれた遺構である。主な遺構として、土坑 3 (SK01, 02, 03), 約 90 個のビット群が検出された。

土坑は調査範囲の北西隅にあり、SK01 は径約 95cm, 深さ 30cm の土坑で、土師質のすり鉢を含んでいる。SK02 は短径約 1.2cm, 長径 1.4cm, 深さ 70cm の土坑で土師質の土鍋を含んでいる。SK03 はかなりの削平を受けていたらしく、遺物はほとんど見当たらなかった。

約 90 個のビット群の中には、並びの確認できるものも含まれているが、建物遺構であるかは、なお少し検討が必要であろう。

これらの遺構は全て砂層に掘り込まれており、このあたりの地形から推察すると、宮川の流れによってできたある一時期の砂の堆積地に生活面があったと思われる。

遺構面の広がりは北の端の畠地と真中の畠地の間に 1m 近くの高低差があることから、おそらく拡張区以北へは広がらないだろうと思われる。

3. 遺 物

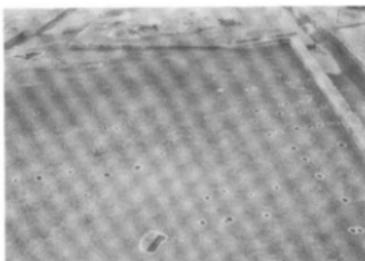
丘陵上における 3 本のトレンチ及び拡張区から出土した遺物は、土師器、須恵器、瓦器、染付、陶器、輸入磁器、瓦片などである。また、遺構面で検出された土坑・ビット群からは、すり鉢、土鍋などが出土しているが明確に時代を決定づけるものはなく、遺物量も少なかった。丘陵下の出土遺物が延命遺跡の特徴を表わさないので、丘陵上の遺物で今後の調査の進展を見ることにしたい。

丘陵上での出土遺物は主に土師器・瓦器・輸入磁器・須恵器である。（第42図）

土師器小皿 1～8 は、底部調整でヘラ切り手法と糸切り手法に大別できる。ヘラ切り手法の小皿 1～4 は、ほとんど口径 8cm・器高 1cm 前後で、体部が直線的に外方に延び、体部は丸みを持ち、口縁は丸くおさめられている。少し内輪気味の口縁もある。4 は外反する体部をもち他とは

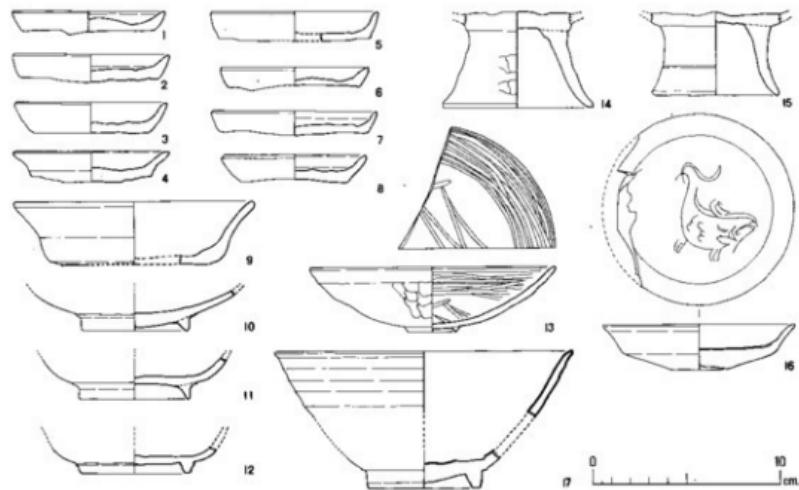


第 40 図 延命遺跡調査風景



第 41 図 延命遺跡丘陵下調査区ビット群

違う形態をもつ。糸切り手法の小皿5～8は、口径・器高・形態もほとんどヘラ切り手法の小皿と変わらない。土師器杯9は、口径12.7cm器高3.3cmで底部は糸切りされており、体部は「く」の字形に外反し、口縁に至る。口縁部は丸くおさめられている。土師器椀10・11・12は底部に直立した高台がつき、直線的な体部と内彎する体部がある。瓦器碗13は、口径13.2cm・器高3.9cm・器高指数29.5を計る。断面三角形の高台を持つ底部から内彎気味に延びる体部を持ち、口縁部は丸くおさめられている。ヘラミガキは内面口縁部に顕著であり、見込み部分には斜行状に施されている。14・15は杯に脚を貼りつけた有脚杯である。高さ4cm脚底部8cmを測り、下端に向うに從って外に踏み出す脚を有する。有脚杯は現在、西村遺跡で数点を見るのみである。16は龍泉窯系青磁皿である。内面見込み部分にヘラ状工具で文様を刻している。17は大宰府跡編年Ⅷ類に属する白磁椀である。内底見込み軸を輪状にカキ取ってある。体部は直線的に外上方へ延び、口縁部は外反している。



第42図 延命遺跡出土 遺物実測図

4. おわりに

今回の調査が文献に記載されない城跡の姿を鮮明に写し出してくれることを期待しながら調査を進めて來たが、2月1日までの丘陵下の調査では、高野城との関係も遺構自体の性格についても、何も解答が得られなかった。丘陵下の遺構は土坑SK01・02・03及び約90個のビット群である。これらビット群は、建物が建つ可能性もあるが、確実とは言えない。土坑から出土した遺物は少なく、遺構面上層下層の遺物からも、特定の時期決定までには至らなかった。

丘陵上については、現在精査中のため、正式な調査結果は後日に譲ることにするが、出土した遺物の実測図と、問題点を提示しておく。丘陵上より出土した遺物は土師器・瓦器・須恵器・瓦・輸入磁器などであるが、その中で特に注意したいのは、土師器の小皿、及び瓦器についてであるが、第5図の1～8・10・13・14・15は一括資料で外面底部がヘラ切り手法の小皿と糸切り手法の小皿とがある。瓦器は畿内産のもので、13世紀後半のものに類似する。

現在、香川県では、昼夜城跡、天霧城跡などで、土師器小皿における外面底部ヘラ切り、糸切り手法の共存時期を15～16世紀においているが延命遺跡での調査によって、香川県におけるヘラ切りから糸切りへの変換期及び共存期間が今後問題となってくるであろう。

また土師器小皿において、糸切り手法とヘラ切り手法は、胎土によって明確に区別できる。

糸切り小皿は、0.1mm～0.5mm程度の砂粒を多量に含み、器壁調整も粗い。ヘラ切り小皿は細砂を少し含むが糸切り小皿と比べると胎土も密で、焼成も良い。全てがこれら2つに大別できるかは今後の資料の増加を待ちたい。

この胎土の違いが何に起因するものかは課題である。

(片桐孝治)

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査実績報告書

1984年3月31日

発行 香川県教育委員会

印刷 成光社